

堀辰雄『風立ちぬ』とシュニッツラー

清田文武

一 『風立ちぬ』成立の一契機

森鷗外作品・翻訳は、同世代あるいは次世代の作家・詩人に影響を与えるところ少なかった。そうした人として堀辰雄が挙げられ、代表作『風立ちぬ』に対する刺激を考えることができるのではなからうか。

『風立ちぬ』は、はじめ「発端」（『改造』昭和一一・一二）、「風立ちぬ」（同上）と発表され、続いて「冬」（『文芸春秋』昭和一二・一）、「婚約」（『新女苑』昭和一二・四）と書かれた。これらは発表順序とは異なる形で新選純文学叢書の単行本『風立ちぬ』（新潮社、昭和一二・六）として出版されたが、昭和十三年（一九三八）四月「死のかげの谷」（『新潮』昭和一三・三）を加えて一本とし、改めて野田書房から同書題で刊行を見た。いま各章の初出のタイトルを丸括弧によって示すと、「序曲」（「発端」、「春」（婚約）、「風立ちぬ」、「冬」及び「死のかげの谷」となる。

こうして出来上がった作品の執筆意図について、創作に着手した段階では、立原道造に宛てて、「今日から小説やつと書き出したところ。いまのところ仮りに『婚約』といふ題をつけてある。二人のものが、互にどれだけ幸福にさせ合へるか——さういふ主題に正面からぶつかって行くつもりだ」（昭和一一・九・三〇、傍点引用者）としたためている。文面に見える「婚約」とは、後に「序曲」と改題された「発端」と「風立ちぬ」とを指すが、つとに谷田昌平が述べたように、「二人のものが、互に云々」の辞句に、「死を前にして」という言葉を補うべきものであった。事実、「冬」

の章において、小説を執筆しようとする作中人物の「私」が、上掲のものとほぼ同じ主題に「その余りにも短い一生の間を」と加えて想を練っていることが書かれているのである。

『風立ちぬ』に関係した堀辰雄の実人生について触れると、昭和九年（一九三四）九月矢野綾子と婚約して、翌年七月この許婚に付き添って信州富士見高原のサナトリウムに入った。しかし、自らも同じ肺結核を養う堀は、十二月婚約者の死に遭わなければならなかった。『風立ちぬ』はその十か月後に着手し、上記のごとく出版されたが、最終章はなかなか脱稿できなかった。筆は心理的にも難渋し、あまり進まなかったのである。けれども、リルケの『鎮魂歌』*Requiem*（一九〇九）を読んでいるうちに書きたくなり、「死のかげの谷」を殆ど一気に書き、二年越しに『風立ちぬ』は完結して上梓された。作者自身エピソードについて、「その最後には是非付けたいと思つてゐた、自分と共に生を試みんとしてその半ばに倒れた所の愛する死者に手向ける一篇のレクイエムです」（『山中雜記』『新潮』昭和一一・八）と語り明かしている。

当時堀辰雄は軽井沢の油屋旅館で執筆していたが、昭和十二年十一月十九日の留守中旅館が灰燼に帰したため蔵書を失った。その後川端康成の別荘に移って書き進め、『風立ちぬ』は完成した。そういう創作の楽屋裏を推測させるものとして、舟橋聖一の回想文中の一事が見逃せない。終戦直前の七月軽井沢の藤屋旅館に泊した折のことを綴ったもので、交通事情

もあって、堀には会わなかったというが、次のとおり記していることである。二人は大学で知り合い、同じ本所生まれということからも親しくなっていたのである。

まつたくその頃は日本中が上を下への騒ぎだったので、どこに誰がいるか、皆目知れなかつたが、却つて堀のような病人のほうが、居場所がはつきりしていた。汽車は沓掛にはとまつたが、信濃追分は素通りした。わたしは窓から首を出して、この山間の小駅に別れた。

六年ほど前、油屋へたずねたときは、彼はこの駅まで、わたしを送つて来てくれた。駅は中仙道から、キロほど下つたところにあつて、落葉松や白樺のある林に沿つた散歩道が出来ていた。そのとき堀とわたしとは、どういうわけだつたか、シュニッツラーの話をしきりに合つた。また、『かげろふの日記』の原稿が、何十枚かたまつたという話もきいた。「全訳は不可能で、自分の好きなところだけ訳したんだが——」と堀は云つた。(傍点引用者)

ここに「六年ほど前」とあるのは、「八年ほど前」と訂正を要するのではなからうか。『かげろふの日記』は九月ころ書き始め、油屋灸上直前に脱稿したのであるから、舟橋の訪問は十月かその前後の月であつたに違いない。シュニッツラーのことでしきりに話し合つたと見えるが、文面から推して、積極的に話したのは堀の方ではなかつたか。執筆中の『かげろふの日記』とともに話題になつたことから考えると、堀は自分の創作との関係でこのウィーンの作家について語つたことが推測される。すなわちその小説が『風立ちぬ』の執筆に際し刺激と示唆とを与えるところがあつたと想察されるのである。

その点で、堀辰雄の許に親しく出入りし、指導も受けた中村真一郎が、次のように述べていることを見落とすわけにはいかない。

氏は、あくまでその主題は、人生そのものの痛切な経験から、あるいは回復不能なほどの、人生出発時における魂の傷口から、つかみだしたものであつた。しかもそれに文学作品としての形式を与えるためには、氏は自身に共感を与える、そして日本の文学界にとっては、最新の文学作品を跳躍台に利用した。(中略)そして、『聖家族』にラディ

ゲ、『美しい村』にフルーベト、『風立ちぬ』にリルケというふうに、そうした跳躍台を数え立てる場合に、師芥川ゆずりの、多読家である氏は、同時に、思いがけない——というのは、およそ氏の作風からは想像もつかない、という意味であるが——別の作品をも、作品の構想なり、細部の仕上げなりに、遠慮なく利用して、私たち読者がそれに気がつくのを、作者はまさかしの悪戯を仕掛けた人のように、笑つて見ているような気がするところがある。

右のうち『風立ちぬ』については言えば、重く切ない人生体験としての矢野綾子との愛と死別、リルケ文芸による支え、それらに作品としての形式を与える先蹤作の存在の示唆といった参考事項が記されているからにはならない。すぐ続いて、上記シュニッツラーについて下のごとく記している。

『風立ちぬ』では、さし当つて、あの療養所での愛する男女の共同生活という、日本の在来の小説には全く先例のない情景を描く見本として、氏は何と、氏の文学的趣味にとっては恐らく肌合ひのちがいがすぎる、前世紀末のウィーンの情痴作家、シュニッツラーの『みれん』(森鷗外による、いち早く紹介があつた)を、明らかにとり上げている。

このシュニッツラーの小説の場合、男女のうち、病人の方は男性なのであるが、しかし、病氣、死、と芸術的制作と生命の認識という、堀さんと相似な材料が用いられていて、似たような山間の療養所で、似たような日々を過している。『風立ちぬ』のなかで、山腹にかかる雲は、時として作者が目指したものでなく、『みれん』の「頁から借りて来たもの」であつたかも知れない。しかし、それは完全に、作品のなかに溶けこんでいるので、その効果を弱めてはいないし、読者の魂を揺るがすための、巧妙な情景の役割を果しているのである。

文中の『みれん』は、原題「死」(Shikan) (八九五)の翻訳であつて、はじめ明治四十五年(一九一〇)新聞に連載され、同年単行本として硯山書店より刊行された。右はそういう作品と『風立ちぬ』とのかかわりに言及したもので、肝要なところをおさえた評言と言えよう。

同じく両作品に着目したものに小久保実の論があり、やはり舟橋の上掲回想を引いた上での考察である。すなわち、堀辰雄の「内部にシュニッツラーがある位置を占めていたと考えられる。」とし、『みれん』の筋を示してから、「風立ちぬ」の〈私〉と節子とが、全く逆になっている」と捉え、ともに「愛と死」が主題であるとする。そして、「鷗外訳『みれん』を傍において「風立ちぬ」を書いたと思われるくらい、この二つの小説は良く似ている。」と述べている。このような先蹤の論に従って、『風立ちぬ』の成立事情から、シュニッツラーとの関係に焦点を当てて筆を進めてみたいと思う。

二 『風立ちぬ』と『みれん』

大正十年（一九二一）第一高等学校理乙に入学した堀辰雄は、このころツルゲーネフ、ハウプトマンとともにシュニッツラーを読んだという。堀はドイツ語の原作を繙いた可能性もないことはないが、鷗外への傾倒ぶりから考えると、その翻訳によって読んだものと思われる。同世代の番匠谷英一も、当時の文学青年にとって鷗外訳の『みれん』がいかに惹かれた作品であったかを打ち明けている。若い立原道造は、昭和八年六月から九月まで軽井沢のつる屋旅館に滞在して、よく堀を訪ねた。その『昭和八年ノ一』を閲するに、次のようにある。

堀辰雄氏の持つてゐる本①

好きな本

I 金槐集私鈔

童馬漫語

赤光（初版）

かげ草（初版）

即興詩人

車塵集（中略）

審美綱領

Mystère Laic.

Carte branche みれん（縮刷本）

（中略）

リルケ詩抄

羅生門（初版）

（下略）

「好きな本」と記すのは、もちろん立原のそれを指すが、鷗外の『かげ草』『即興詩人』『審美綱領』と並んで『みれん』（縮刷本）が記載されている。同じノートの「七月一日の夢」には、南陽堂での特売の夢を見たとし、鷗外の『沙羅の木』『みれん』の値段をそれぞれ六十銭、五十銭と書き留

めてある。七月十五日の項には、御岳へ持って行く本として『みれん』も挙げており、よほど関心を引く作品であったらしい。七月三十日の条では、「みれんを読む。（岩波文庫の大きき軽さが快適な午後だった。）」とあり、「面白かった。おかげで何か仕事が出来さうな気がする。うつとりした、力の入った気分である。」とも記し、創作意欲を掻き立てられている。ちなみに岩波文庫版を繙くと、昭和三年四月の発行にかり、小島政二郎による「附記」が巻末に収められている。鷗外が原作者の写真のことで直接手紙を出したこと等を書き、最後に、「シュニッツレルと云ふ作家は、男と女との愛慾を書かした——いや、彼の書く愛慾のうちに、何か深刻なものを求めたり、思想的なものを望んだりしてはいけない。唯愛慾を愛慾のままの姿で、さう、誰かの云つたやうに彼に「ウィーン情話」を書かせたら、ちよつと類の真似手のない作家であらう。」とし、『みれん』を「そのいゝ生きた証拠の一つ」として挙げている。山本有三はじめ当時の我が国における一般的解釈を紹介した観のある一文である。建築家志望の立原は、もっと別に風景・景観的視点から鑑賞した可能性があるが、堀から指導を受けていたこの青年は、逆に『みれん』『風立ちぬ』のことで示唆的なことを口にしたかもしれない。すなわち、立原道造の「風立ちぬ——あなたに感謝を言ふのが、元来この告白の意味なのです」「指導と信託」（『四季』昭和一三・五〇一一）に、シュニッツラーの名は見えないけれども、二人の間話題中関連的に意識されたこともあったであらう。

『風立ちぬ』の少し前の『美しい村』（野田書房、昭和九・四）には、エピタフとして、ゲーテの『ファウスト』第二部から、主人公の独白「天の瀬気の薄明に優しく会釈をしようとして、／命の脈が又新しく活潑に打つてゐる。云々」の七行が掲げられている。訳者名はないが鷗外であり、こうしたことから推定しても、堀における鷗外は注目されてよい。

立原のノートによれば、堀辰雄は大正五年の靱山書店刊の縮刷本（袖珍本）で『みれん』を読んだであろう。その『みれん』は、胸を病む男とこれに仕える恋人との間の愛の変遷を、死の意識を挟んだ人間心理の機微に照明を当てて書いた小説であって、『風立ちぬ』はこれを逆にした関係で捉えた観がある。転地療養は両作共通するが、後者では、婚約者に付いて

行く「私」も肺結核を養う身である。シュニツラー作中の男は一年の余命を医師に告げられており、恋人は愛のために自分も殉じようと打ち明けている間柄である。堀の小説では、節子の方が病は重いにせよ、二人の間の生活は、「普通の人々がもう行き止まりだと信じてゐるところから始まつてゐる」態のもので、類似した要素が見いだせる。両作品に契合性が認められるのは、堀と矢野綾子との間から、偶然によるものでもあろうが、作中人物は置かれた状況で、愛による充実した時間を願うわけである。しばらく類似する方面を観察してみよう。

『みれん』の男フェリックスは、「もし人生を馬鹿にし切つて沈黙の前途に向つて、平気で未来を逆へ見るやうにして、哲人が遺言をするやうに、何か書きたい。」それは「目で見た手で掴んだりするやうなもの」を材料にするのではなく、「自分が克服してしまつた世界に向つて、静かに微笑んで別れを告げる詩」でなくてはならないと考えている。物を書く、創作しようとしている点では、『風立ちぬ』の「私」も同様であるが、「真の婚約の主題——二人の人間がその余りにも短い一生の間をどれだけお互に幸福にさせ合へるか？ 抗ひがたい運命の前にしづかに頭を項低れたまま、互に心と心と、身と身とを温め合ひながら、並んで立つてゐる若い男女の姿、——（中略）それを描いて、いまの私に何が描けるだらうか？」と思いをめぐらせる。二人の男の療養生活中の心理の一端を窺わせるものである。その点でも堀はフェリックスに少なからぬ関心を寄せたことである。

「……あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思へるのは死んで行かうとする者の眼にだけだと仰しやつたことがあるでせう。……私、あのときね、それを思ひ出したの。何んだかあのときの美しさがそんな風に思はれて」さう言ひながら、彼女は私の顔を何か訴へたいやうに見つめた。（傍点引用者）

と堀作品にはある。実際の婚約者とうとうした言葉を交わしたことがあつたに相違ない。次は療養地の湖水の風景、森の夕方のたたずまいに接しての場面である。

フェリックスが云つた。「こんな好い景色があるといふ事は、」は

これまで夢にも知らなかつた。」

「ほんとに好いのねえ。」

「お前に分かるものか、景色が本当に好いといふ事は、暇乞ひをする積りで見なくては分からないのだ。」

男はかう云つて、ゆるやかに二三歩前へ歩き出して、下の方を水に洗はれてゐる柵の、細い木の上に両肘を衝いた。（中略）暫くして振り返ると、女が背後へ付いて来た。女は目に涙の出さうなのを堪へてゐるのが知れた。（傍点引用者）

シュニツラーによるこの描写は、上掲の場面と較べてみると、『風立ちぬ』にあつてもおかしくないものである。

中村が言及した風景はじめサトリウムでの二人の生活の描写のことは、小久保が『みれん』から引いた左の一節が注目される。

重くろしい、燃えるやうな夏の日が来た。昼は焦げ付くやうに暑くて、夜は人を誘惑するやうに生温い。けふの昼もきのふの夜のやうで、けふの夜もきのふの夜のやうである。丁度時間が静止してゐるかと思はれる。

二人は誰にも逢はずに籠つてゐる。（中略）心配のない、笑ひ交す夜と、疲れた親密な昼とが二人の上を通り過ぎる。

さういふ夜の続いた後の或る晩の事である。蠟燭を点けたまゝで二人は寝てゐた。（中略）女が床の上でふいと起き直つた。女は穏かな眠に沈んでゐる男の顔を眺めた。そして息遣ひを聞いた。今ではどうも一日一日直る方に向いて行くのがたしかなやうである。如何にも嬉しいので男の顔に自分の顔を摺り寄せて、男の息が自分の頬に触れるやうにした。まあ、生きてゐると云事は、どんなに美しい事だらう。それに自分の生活の内容は、全くこの男の事で填められてゐるのである。無くするかと思つたこの人を取り返した。（中略）

さう思つてゐる時、ふいと寝てゐる男の息遣ひが今までと違つて来たのに気が付いた。軽い、抑へ付けられたやうなうめきをしたのである。そして男の少し開いた唇に苦痛の表情が見えた。それから男の額には汗が玉のやうに出てゐるのに気が付いて、女はひどく驚いた。男

は少し横へ向けた。そして唇を締めた。表情は又平穩に戻つて、二つ三つ不安らしい息をした跡で、平生の息を音を立てずにするやうになつた。

「重くろしい」という鷗外独特の語で始まる右の二節に対しては、『風立ちぬ』の三番目に配された同題の章から挙げることができる。

たうとう真夏になつた。それは平地でよりも、もつと猛烈な位であつた。裏の雑木林では、何かが燃え出しでもしたかのやうに、蟬がひねもす啼き止まなかつた。(中略)夕方になると、戸外で少しでも楽な呼吸をするために、バルコンまでベッドを引き出させる患者達が多かつた。(中略)しかし、私達は相かはらず誰にも構はずに二人だけの生活を続けてゐた。

この頃、節子は暑さのためにすっかり食欲を失ひ、夜などもよく寝られないことが多いらしかつた。私は、彼女の昼寝を守るために、前よりも一層、廊下の足音や、窓から飛びこんでくる蜂や蛇などに気を配り出した。(中略)

そのやうに病人の枕元で、息をつめながら、彼女の眠つてゐるのを見守つてゐるのは、私にとつても一つの眠りに近いものだつた。私は彼女が眠りながら呼吸を速くしたり弛くしたりする変化を苦しいほどはつきりと感じるのだつた。私は彼女と心臓の鼓動をさへ共にした。ときどき軽い呼吸困難が彼女を襲ふらしかつた。そんな時、(中略)夢に魘はれてでもゐるのではないかと思つて、私が起してやつたものかどうかと躊躇つてゐるうち、そんな苦しい状態はやがて過ぎ、あとに弛緩状態がやつて来る。さうすると、私も思はずはつとしながら、いま彼女の息づいてゐる静かな呼吸に自分までが、種の快感さへ覚える。

燃えるような暑い夏の日の状況と夜の時間。続く二人だけの生活。寝入っている病人の息遣いと付添う人の様子・心理、患者の苦痛の症状後の平安の容態等描写に類似するものが見いだせる。中村の指摘は、具体的にはこうした場面も指しているであろう。共通の表現としては「空を見詰める」「空を見る」の語句も注目してよく、この表現は鷗外作品に時に用いら

れ、翻訳にも散見する。患者は安静を強いられるため、目を活発にする存在であろうが、『みれん』『風立ちぬ』にこれが使われており、翻訳語とするなら、一定していないものの、「ドイツ語では *ins Leere zu starren*」などが挙げられよう。「目を赫させる」というのも鷗外的表現の特色で、やはり両作にしばしば見える。「お前」という呼称もある。『風立ちぬ』の最終章「死のかげの谷」というタイトルは新約聖書に由来し、また「死のかげ」は珍しい表現ではないが、『みれん』に「死の影」の語句のあることも目にとまる。右の二場面など、堀はシュニッツラーを参考にする点があつたであろうし、また鷗外から特に芥川龍之介を介した文芸史的水脈もあづかつていたと思われる。

しかし、『風立ちぬ』は『みれん』ではない。それを何よりも意識したのは作者でなければならない。シュニッツラーのこの小説では、青年の死への恐怖の心理がしばしば描写されており、訳者の関心の一つに、西洋人の死への意識の問題があつたのではないか。『風立ちぬ』にも死への怖れ、不安の心は描かれている。サナトリウムのある患者の死を「嵐」が暴れまわっていると記す夜の場面があり、山頂に幽かに漂う光を見て、突然恐怖に襲われる不安な心を写してもいる。不安や恐怖による互いの心の離反を心配する「私」の内面の描写も見える。けれども、二人は時間を共に生きてゐる方、その意味に心を向ける。当初作者が考え、また作中にも記す主題のためであろう。

こうした問題は、『みれん』では叙述・描写の屈折の対象を選び、諷刺・皮肉を時に織り込む一事も関係していると解される。余命一年と告げた医師の死に慰藉を感じる主人公。自分の死後も相変わらず生きるであろう唱歌会員——この無縁の人たちに対する嫉みからの憎しみの情。フェリックスの名が不死鳥を意味し、それにもかかわらず不治の病のため死の恐怖から相手を求めたらしく、月の光の下、部屋の際で死骸として発見される結末。哲人の遺言のような作品を残すこともなく、生に執着しはじめた人物の心理分析・心理描写をこのように進める目をシュニッツラー——彼はまさに医師であり、また訳者も医学者であつた——は有していたが、堀はこの作では見せないし、またできないことであつたと思われる。文体的に

鵠外にならうとところがあっても、やわらかさで対象を包んだ観があるのがある。こう観察を進めて来るとき、両作とも生を基盤に愛と死との物語を主題としていても、『みれん』は死に、『風立ちぬ』は愛に焦点を結んでいると考えられよう。

ところで小久保の論に、「三人称の『みれん』とはちがって「風立ちぬ」は一人称が採用され、「冬」の章と終章の「死のかげの谷」とは日記体をとっている。こういう形式上の相異は、小説の筋が中途から、『みれん』と「風立ちぬ」とがそれぞれ全く別の方向へ展開されていった点に対応する」とある。そう解釈できるとともに、この間の推移には、堀のいわゆる「裏がへし」の方法もあざかっていたのではなからうか。

芥川龍之介は、昭和二年（一九二七）夏の暑い日に自殺し、堀辰雄はこれに激しい衝撃を受けた。この一事を堀は自分の中で抱き続け、やがて卒業論文に芥川を取り上げ、その後もこの文学の師の存在の意味を自らに問うことになった。そうした一端が、「死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった」と始まる「聖家族」（『改造』昭和五・一一）に結晶したことは知られているであろう。作中の九鬼が芥川に拠っており、河野扁理は作者自身を核に持っているが、「九鬼を裏がへしにしたといふ風」の青年として描かれている。行きづまりのような芥川の死、そこから堀は新たな歩みを始めなければならず、それはある意味で人生の師でもあった芥川の跡とは別の道をたどることを意味した。訣別ということではなく、作中の細木夫人の観察によれば、「彼の生のなかには九鬼の死が緯のやうに織りまざつてゐること」、そのことによつて「生がやうやく分るやうな」形をとつたと言つてよい。そうした芥川の「裏がへし」のように自分を意識する堀には、『みれん』の世界ではなく、共にある二人の「いざ生きめやも」の心を筆にしなければならなかった。それが『風立ちぬ』であるこというまでもない。

しかし、この小説の最終章が書かれるには、堀自身ある程度の回復と矢野綾子の死を自身の中に位置づけるためとの時間が必要であつたのである。あるいは当初の主題意識の微妙な変化の問題も生じていたのかもしれない。そういう関門を前にして、力を与えたのが、リルケの『鎮魂歌』であつた。

この方面では、シュニッツラーをすでに去つたのである。フェリックスから、死の恐怖、生への未練のために逃走したマリイとは違って、「私」は一年後かつての場所を訪ね、死者節子に、リルケの作をおとして、「帰つて入らつしやるな。（中略）死者にもたんと仕事はある。／けれども私に助力はしておくれ、お前の氣を散らさない程度で、／屢々遠くのものが私に助力をしてくれるように——私の裡で——と語りかける。日付けからするとイエス生誕のことを響かせているのであろうが、続く十二月二十四日の日記中、自分の住んでいた小屋のヴェランダから枯木林の雪明りの中と差す光を見て思うところを引くこととしたい。そこにはわれわれの生の意味を発見して励ましてくれるようなものを認めることができるからである。

「——だが、この明りの影の正合なんか、まるでおれの人生にそつくりぢやあないか おれは、おれの人生のまはりの明るさなんぞ、たつたこれつ許りだと思つてゐるが、本当はこのおれの小屋の明りと同時に、おれの思つてゐるよりもつとつと沢山あるのだ。」さうしてそいつ達がおれの意識なんぞ意識しないで、かうやつて何気なくおれを生かして置いてくれるものかもしれないのだ……」

「私」は、十二月三十日の日付けのある条で、風の音を耳にしながら、「死のかげの谷」を「幸福の谷」と呼んでもよいような気がしていることを記して、作品の世界は静かに閉じられるが、風の音は、冒頭の場面と呼応していると解される。死者節子との対話も関係していなければならぬが、「何気なくおれを生かして置いてくれるものかもしれない」の表現は、宗教的なものを感じさせずみを含んでいる。リルケを介した、われわれの生はわれわれの運命以上のものであるという堀の認識や、『伊勢物語』等をめぐつての、「人々に魂の静安をもたらす、何かレクイエム的な心にしみ入るやうなもの」が「よき文学の底」にあるべきだという認識との響き合いを、すでにこの一節に感じさせるものがある。

こうした作品の形成に、その題材からすると、超克すべき先蹤として意識されたはずの『みれん』は、いわばある程度の枠組みとリアルな要素とを提供したに違いない。堀が竜橋聖一と語り合つた内容は定かでないけれども、右のようなことに関連があつたと考えられるのである。

堀多恵子の「晩年の辰雄」の一文に、次のごとく、思い出の一齣が書かれている。

私は或る長雨の日、無意識に「つまらないなあ」とつぶやきながら硝子戸越しに庭を眺め、そして其処にあった藤椅子に腰を降ろし、何げなく病人の方に目を移しますと、じっと私の方を見て何か言いたそうにしている顔にぶつかりました。私は、

「どうかなさったの？」と聞くと、

「つまらないのかい、どうしたらいいだろうね」と言われ、すっかりあわててしまったことなど思い出します。(中略)

「鷗外はね、杏奴さんというお嬢さんになんでもないようなことを楽しまなければいけないって言ったって何かに書いてあったよ。おまえも心がけて見るんだな」と、辰雄はそんなふうな話し方をしました。

时期的には『風立ちぬ』の成立と関係ないとしても、このように話した堀辰雄が人としてその世界に表れているところがあるであろう。

注

- (1) 竹内清己「堀辰雄における森鷗外の位置」(『文学論藻』第七十一号、一九九七・二)があり、『即興詩人』『キタ・セクスアリス』『ギョオテ伝』『澁江柚斎』の諸作品を取り上げている。
- (2) 佐々木基一・谷田昌平著『堀辰雄』(青木書店、一九五五)一三八頁参照。
- (3) 舟橋聖一「堀辰雄思い出抄」(『文芸 堀辰雄読本』臨時増刊、昭和三二・二)参照。
- (4) 中村真一郎「堀辰雄 人と作品」(『風立ちぬ・美しい村』新潮文庫、昭和二六(初版)、平成九の百二刷)参照。
- (5) 小久保実著『堀辰雄論』(麦書房、一九六五)三九〇四五頁参照。
- (6) 『みれん』(角川文庫、昭和二八)の解説参照。
- (7) その意義については佐々木基一「堀辰雄の世界」(注(2)の二四三頁)参照。
- (8) 清田文武「森鷗外におけるシュニッツラーの『みれん』」(『新潟大

学教育学部紀要』第三十七巻第一号、一九九六・三)参照。

- (9) 主題が作品で真に具象化されたかどうかの問題は検討課題として残るであろう。この問題については西原千尋著『堀辰雄試解』(蒼丘書林、二〇〇〇)六七頁参照。

- (10) 堀の西洋文芸受容の変遷については菊田茂男「堀辰雄の文芸観」(『文芸研究』第十四集、昭和二八・九)参照。リルケとの関係については、他に注(2)の書、富士川英郎「リルケ——堀辰雄の西欧的なもの」(『解釈と鑑賞』昭和三六・三)、神品芳夫「堀辰雄とリルケ」(『国文学』昭和五二・七)等参照。

- (11) 堀辰雄「魂を鎮める歌」(『文芸』昭和一九・六)参照。

- (12) 堀辰雄著、堀多恵子編『妻への手紙』(新潮社、昭和三四)所収。話中の鷗外については小堀杏奴著『晩年の父』(岩波書店、昭和二二)七頁参照。